



沖縄国際大学 FD通信

発行者：沖縄国際大学 教務部長（2011年11月25日）

「教室外の 30 時間をどのように学べきか」を書いていないシラバスは無意味である。 —第 3 回 FD 研修会「シラバスの在るべき姿を考える Part2」を開催しました—

11月4日(金)に「シラバスの在るべき姿を考える Part2」というテーマで、2011年度第3回FD研修会(通算第6回)を開催しました。

講師に安岡高志氏(立命館大学教育開発推進機構教授)を迎え、「学生の学びにおけるシラバスの果たすべき役割」について講演頂きました。

講演の中で、安岡氏は「**1単位45時間のうち、教室外の30時間をどのように学べきかを書いていないシラバスは無意味である。シラバスという小道具は、1単位を与えるための45時間を効果的に学ばせるための小道具と理解すべきである**」と述べ、多くの大学が「何のためにシラバスを導入するのか」ということを十分に理解しないまま現在に至っており、その結果として「シラバスを導入すること」が目的化され、シラバスの果たすべき本来の役割を見失っている現状が説明されました。

講演内容は、次のとおりです。

- 1) 「学士課程答申」には何が書かれているのか
- 2) 大学における教育内容等の改革状況—平成20年度文科省調査結果より—
- 3) 単位制度は日本の大学教育の何を保証しているのか
- 4) なぜ、学ばない学生が生まれたのか
- 5) 単位制度におけるシラバスの果たすべき本来の役割は何か
- 6) 成績評価とシラバスについて
- 7) シラバスへ記載すべき「到達目標」の事例
- 8) セメスター制度、キャップ制度、GPA制度の本来の目的
- 9) 質保証について—PDCAサイクルを中心に—

また、質疑応答の場面では、「学習成果の測定」についても触れられ、「教育は測定できない」という固定観念を取り払うための心得についても話が及びました。

安岡氏は「客観的指標」というコトバの落とし穴について言及され、「組織は測定しやすく批判を受けにくい指標を探し始める傾向がある」ことが指摘されました。

「この指標に従ってやれば、大学が良くなる、成長する」など、大学が自信と確信を持つことができる指標を見つけることの重要性が述べられました。

安岡先生より、効果的な指標を大学が発見するための心得として、PDCAサイクルにおける「Plan」の実質化が重要であること、そのための4つのポイントを次のとおり提示して頂きました。

- 1) 達成すると大学の発展に繋がる取り組みを決める。
- 2) 達成するために全員がどういう気持ちで臨むべきかについての共通認識を持つ
- 3) 成果が出た場合、その成果を何で測定するのかを決める
- 4) どこまで達成したら、大学として目標達成と言えるのかを決める



！スターボックスの組織風土が、学習成果の測定を考える際に役立つそうです！